

[特別寄稿]

## 千葉大学図書館亥鼻分館蔵 医学古書コレクションの内容

樋口 誠太郎

(1998年12月7日受理)

**Key words :** 亥鼻分館医学古書コレクション, 皇国医学

### 1. はじめに

従前、千葉大学医学部図書館に所蔵されている膨大な貴重書は古医書コレクションとして医学部の前身である第一高等中学校医学部時代(明治26年-明治34年 [1893-1901]), 千葉医学専門学校時代(明治34年-大正 [1901-1923]), 千葉医科大学時代(大正12年-昭和24年 [1923-1949]), 千葉大学医学部時代(昭和24年 [1949]-現在に至る) 収集されたものである。此の間もっと詳細に見れば、明治7年(1874)の共立病院時代や明治9年(1876)の共立千葉病院時代、明治15年(1882)の県立千葉医学校時代の蔵書等、その蔵書印を検討して、千葉大学医学部そのものの歴史と、当時どの様な医学書が収集使用されたかを探究することも必要であるが、現段階では第一段階として整理の内容を中心に紹介する。

当館で所蔵する「医学古書コレクション」の主体は、江戸時代全期(17世紀-19世紀)から明治時代初期に出版または、筆写された医学古書のコレクションで、国書、漢書、洋書などがあり「古医書」と称されるが、それ以外には天文、和算、文学、史書の珍しい書籍も多く保存されているが本稿では「古医書」を中心に紹介することにした。

当館の、この様な貴重な古医書は、大正8年か

ら昭和30年迄在職された伊藤弥恵治教授が医学史の研究に役立つ目的で、伊藤教授の専門である眼科に限らず広く医学全体の古医書を、大正末期から昭和20年代にかけて収集されたものが主体で、それだけでも1,406点、4,084冊となっている。それに加え昭和20年代に本県茂原市上永吉で代々眼科医を開業していた千葉弥次馬氏から寄贈された同家伝来の古医書202点、995冊があり、この中には本草学、漢方、眼科、鍼灸などの医書が見られ、「千葉本家文庫之章」の蔵書印が見られるので区別がしやすく、集計ではもっと点数があると思われる。現在は未だ整理の進行過程であるので、決定的なことは言えない。

この外に、佐倉市の順天堂医院第4代院長佐藤恒二氏からの寄贈による順天堂医院所蔵の古医書(主として蘭方医書)、177点、339冊、幕末に牛痘種法の普及で知られる三宅春齡の孫、三宅しづ氏より寄贈された春齡の著書等10点などが入っている。

これらを亥鼻分館の過去の調査結果によって整理して見ると次の表1の様になる。

また当館では、昭和56年3月『医学古書目録』として、書名・構成・著者・刊行年・配架番号が示された目録が作成され、これによって或程度の内容が判ってきた。

これに対し現在私が行なっているのは、前記の

千葉敬愛短期大学

Seitaro Higuchi: Introduction of Inohana Collection: Old medical books owned by Library of Health Science, Chiba University.

Chiba Keiai Junior College, Sakura 285-0807. Tel. 043(486)7111.

Accepted December 7, 1998.

表1 亥鼻分館における調査結果

種別	区分	点数
大別		
漢籍		212
国書	漢方	585
	鍼灸	40
	本草	72
	薬学	74
	洋方	234
	蘭方	152
	その他 <sup>1</sup>	138
	その他 <sup>2</sup> 物理, 天文, テキスト	233
洋書	医学	50
	語学他	6
合計		1,796点

内容を包含することは勿論であるが加えて、簡単な解説を付けると共に和漢医書、と洋方、蘭方医書に大別し整理番号によって、その内容が把握できる様にするのである。

## 2. 亥鼻分館「医学古書コレクションの概要」

前述の通り医学部図書館時代から長年収集された「古医書」が太平洋戦争中昭和20年7月の千葉空襲にも被害に会わず、ほとんど整理されぬまま現在に至ったことは「幸運」の一語に尽きるであろう。

これらの医書については、単に目録づくりだけではなく書誌学的調査も必要であろう。しかし現時点では前者を優先させて仕事の進展第一を目指している。それでもこの作業を開始したのは平成6年からであり、現在やっと見通しらしいものが見えてきたと言う段階である。

当館の「古医書」は「医学関係貴重書」とされ、他の図書とは別にして大切に保管されている。

その内容は中国（清時代）の舶載本、江戸幕府刊行医書、漢方医書、習俗伝承医療、本草学、蘭学書、洋方・蘭方医書、法医学書、和方医学書、などをタテの区分とすれば、ヨコに医療・薬学・外科・内科・産科・小児科・痘瘡・解剖・鍼灸・整骨・生理・俗信などに大別できるであろう。

しかし、江戸時代には現在の様に医学が明確に区分されていたわけではないので、外科・内科・薬学とか本草と薬物の区分など明確にできかねるものもある。これらはその医書が何を重点に置いて著わされているかによって分類する以外はなかった。

また当館のコレクションの中には多くの医書の筆写本が見られる。江戸時代には貴重書の筆写をアルバイトにしていた人もあったことを具体的に知ることができるが殆どの場合筆写年月日とか誰の蔵書から筆写したか、筆写をした人物の氏名も判らない、原本の刊行年などはほとんど記されていない。原本の題名の誤記も見られる。本稿ではこうした古書の中から特色のあるものを二種類ほどとりあげ紹介してみたい。

## 3. 皇国医学（和方医学）書について

幕末の医学というと蘭方・洋方が有名で、皇国医学（和方医学又は古医道）と言うと、あまり知られていないので、当館所蔵のこれらの医学書を先ず紹介しておくことにしたい。

まず表2に見られる様に富士川游氏の『日本医学史』により幕末の皇国医学（和方医学）の研究者とその著書を見て、当館にどの程度、それらの著作が存在するかを調査してみた。未だ調査が完了したわけではないので、その点は了解していただきたい。皇国医学は和方医学又は古医道とも称され、その源泉は戦国時代までさかのぼれる様であるが、最盛期は何と言っても幕末期である。内容によって検討すると当館所蔵の古医道書（和方書）によれば、文明16年にまとめられた『和方凍青堂家言』と言う古書がある。一卷物で巻末に「文明十六（1848）甲辰年孟春、行年百七十五歳沙門慈赫述」とあり更に、これを刊行した人として「摂州住吉郡平野郷、三上慈岳老人…」との名があるが、本書は文明期（1469-1486）のものでなく後世に、三上慈岳によって刊行されたものである。

本書は『和方』と題されていて、初丁は総論から始まっている。その中に次の様なことが記されていて「和方医学」の要点を良く示している。

「1. 和方伝来は脈にて諸病を見分くる論なし、

表2 『日本医学史』に見る古医道家の著書当館書蔵本の対比

関	岩	衣	中		権	万	花	鶴		佐	武	松	森	太	古
政	田	川	島		田	年	野	沢		藤	藤	川	川	田	医
方	広	長	広		直	櫟	井	貞		方	直	鶴	宗	見	道
	彦	秋	足		助	山	有	眠		定	記	鷹	円	龍	家
神遺方傍註・註解	校正大同類聚方	神方経験・医則	疫瘡新論 薬品解病名解		古医道治則 古医道沿革考 古医方薬能略 古医道或問・医一言 古医道脈伝 神遺方経験鈔	皇国医系	医方正伝 経験大同類聚方	神視録		奇魂 八葉新論 幸魂・術魂 神伝脈論 産靈草 医語拾遺 神伝脈論・腹證論	大同類聚方(校訂) 薬品解・薬能解・病名解	日本古代医方	医言靈 少彦名命三十六法和薬伝 秘書	神道奇霊伝 病家全要・治方要集	著
				10	2		2	1				2		3	書
					○	○		○		○	○				卷
															所在
文政六年刊 神遺方(3)			西洋医説弁 古医道脈伝			皇国医系		神視録		奇魂	校訂 大同類聚方			文明16年刊 和方凍青堂家言(1)	当館所蔵の古医道書

服薬・養生導くのみ素人ハ脈にて諸病しれる様に思ふる事、甚心得違也。脈にて病ハしれるものもあらずと心得べし。

往昔、百濟国の帝より和方望まれし事有然ども唐と日本ハ人の性合違有故あへて渡さず右返翰のくだり改書にしるす。

1. 今世間に用る薬ハ唐より渡り病悉治する道理なれども日本の人に用いる時ハ薬の効、速ならず、たとへていはば日本の人の煩ハ膳碗のかけそんじたるごとく唐の人の煩ハ鍋釜のかけそんじたるごとし。其の鍋がねをつくろふ目あてにこしらへたる薬にて日本の膳碗のつくろひ出来るはずなし、然るに日本に用る薬ハ皆唐流故元来の違有、日本は神代より教へつたふる所の和方より外に病治する薬なし、唐も日本人の替りハなけれども身体の性合違ある事也。書物の道理ハ尤なれども日本の人に用る時ハ薬にならず。薬にならざる時ハ毒となる事也。医者も素人もよくよくかんがへ猥りに薬用うべからず(以下略)。」

佐藤方定の『奇魂』(全二巻)天保2年(1831)

刊行の書を見ると古事記、日本書紀の記述を尊重する。一方では当時の和方医家が重用した『大同類聚方』を偽書とし、『奇魂』二巻の「薬方」書籍考の所で、『金蘭方』と共に「おのれも、はやく是を得て悦びしかど彼是を校合すれば偽書にぞ有りける。頃日其二書共に各々板に彫たる人々あり、今ハ論ふまでもなき偽書なれど、尚迷う人、あめれば其凡をいはん、『大同類聚方』と名づけたる書ハ天明の比、大阪と江戸にて、板に彫しハ丹波良康と云人の鈔キしたるものの由なれど、何も纔に十三方ばかりある小本にていと鄙くて、物の数にもいるべからず…(後略)」と否定している。『日本医学史』によれば、和方家の項で「国史ソノ他ノ古文書ニ徴シ、我が邦古来医風、変化、医薬ノ名義・医道濫觴・気候・病源・養生・診候ヲ論ジテコレヲ支那及ビ西洋ノ所説ニ比較シ、又薬方・禁厭・刺法・灸・灌水法・浴温泉法・按摩術・開胎術等スベテ上古ヨリ今ニ伝ハレル治方ヲ列举シテ以テ我が邦神代ヨリ固有ノ医道ノ存スルコトヲ歴史的ニ証明セリ…(下略)」とある。

これを参照すると佐藤方定が唯、観念的な皇国医家(和方医家)ではなかったことが判る。

更に権田直助の『西洋医説弁』は、後世のもの様で「神真ノ医道」を伝えたものは『神遺方』である、と『西洋医説弁』の巻上の巻頭に記している。この点佐藤方定の方が良く文献を研究しているとも言える。『神遺方(図1)』は上・中・下全三巻で文政6年(1823)に、丹波頼理が撰したものである。(当館には上・中・下全巻がそろって収蔵されている。)

また権田直助が巻頭でとりあげている西洋医書(和訳本)として宇田川玄随の『西説内科選要』, 其の子玄真『医範提綱』, 『和蘭藥鏡』(図2)があり前者は寛政5年(1793), 後者は文化2年(1805), 文政11年(1828)の刊行であり, 権田直助はこれらに目を通した上で「神真ノ医道」を主張しているのであるが, 皇国医家が当時最新のオランダ医学の影響をかなり受けていることが見られる著書として注目されよう。なお皇国医家としての権田直助の著書リストの中に, この『西洋医説弁』上・下二巻は入っていない。このことは皇国医家の著書ではあるが, その内容については, 皇国医学の域を脱していると見られたものであろうか。もしその様な評価で『皇国医事大年表』文献の項などからも除外されているとすれば, 皇国医学の歴史を知る上ではこちらの方が興味あることがらである。

#### 4. 蘭方医書について

当館の所蔵する蘭方医書について, その代表的なものを見ると『解体新書』杉田玄白(安永3年刊)のものが代表的なものとして挙げられるがその他, 様々な著書が見られる。表3は, 現在貴重書として当館が収蔵するものの中ですでに調査が済んだものの中から『日本医学史』, 『日本医学の夜明け』などに紹介されている医書リストと対比して, その有・無を比較したものである。

これを見ると, かなり多くの蘭方書が当館の所蔵書の中にあることが判る(図3)。これは, 前述の皇国医学書(和方医書)の比ではないことが一目瞭然である。

著者としては, 杉田玄白・宇田川玄真・大槻玄沢・杉田立卿・伊東玄朴・箕作阮甫・新宮碩・佐藤尚中等々, 幕末の蘭方を研究していなくてもその名

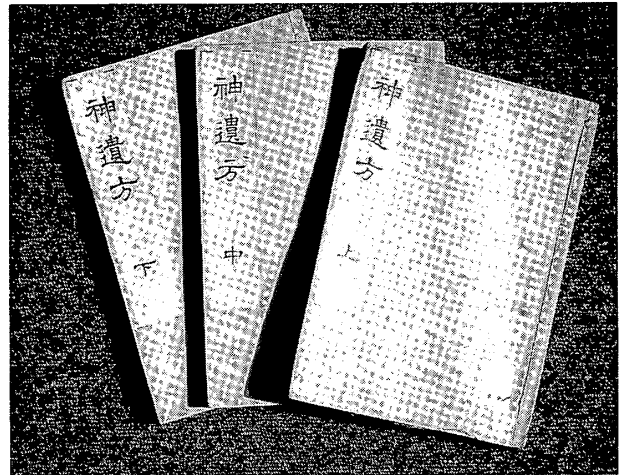


図1 『神遺方』丹波頼理著

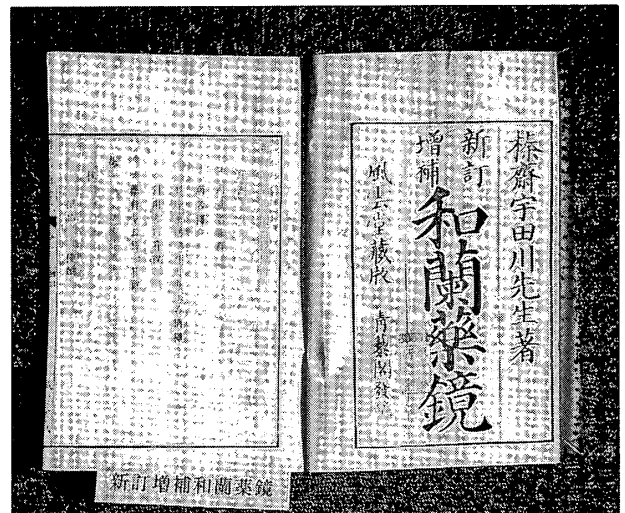


図2 『和蘭藥鏡』宇田川榛齋著



図3 『泰西熱病論』吉田長淑著

表3 代表的な蘭方書と当館の所蔵書について（一部調査のみ）

○は所蔵有 ×は所蔵無

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
銅版図、宇田川玄真	和蘭内景内象	同右 附録	和蘭用業便覧 日高涼台	同右	新訂増補和蘭薬鏡 宇田川玄真	阿蘭陀秘伝書 林宗賢	和蘭内景医範提綱、 宇田川玄真	阿蘭陀国外科加須波 留先生系脈	解臟図賦、池田冬蔵	阿蘭陀カスハル流書	和蘭医方纂要 江馬元弘	遠西二十四方(写)	西説内科撰要 同右	遠西医方名物考 補遺 同右	遠西医方名物考 宇田川榛斎	遠西医範眼篤訳 宇田川玄真		
文化5	弘化4	天保8	文政11	文政12	文化2	文政5	安永7	文化14	天保2	文政5	文政5							
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
眼科新書 杉田立脚	泰西疫論 新宮 碩	斯篤魯默兒砲痕論 佐藤尚中	西洋医事集成宝函 橋本宗吉	整骨新書 各務文獻	扶民經驗遺 緒方洪庵	波留間和解 稻村三伯	紅毛外科真伝(写)	銃創瑣言 大槻俊斎	医療正始 伊東玄朴	軍陣備要救急摘方 平野元良	泰西名医彙講 箕作玩甫	外科訓蒙図彙 伊良子光頭	蘭方枢機 小森義啓	蘭学事始 杉田玄白	蘭学階梯 大槻玄沢	重訂 解体新書 大槻玄沢		
文化13	文政7	慶応元	文政6	文化7	安政4	宝暦13	安政元	天保6	嘉永6	天保7	明和4	文化14	明治2	天明3	文政9			

前を耳にする医家・学者たちである。

今後調査がすすむと更にいろいろな著書が出てくることであろう。「(一部調査のみ)」というのは、調査中ということである。

江戸時代後期の医書が表3,に見られる様に集中的に集まっていることも当館所蔵の古医書コレクションの特色の一つと言って良いであろう。

### 5. おわりに

千葉大学図書館亥鼻分館に収蔵されている「古医書コレクション」の整理をすすめていく過程で、その内容構成が或る程度判ってきた。

今回これらの中から皇国医学(和方医学)と蘭方医書を抽出して、現時点でどの様なことが判ったかということにふれてみた。

皇国医学(和方医学)は、幕末の政治社会が医学に反映したもので尊皇攘夷思想、国学などの思想を医学がとり入れたもので、万年榛山の『皇国医系』(文久元年刊)や平田篤胤などが知られている。

しかし、表2に見られる様に、当館所蔵の皇国

医学(和方医学)関係の本はそう多くはない。古書だったら何でも集めると言うのではなく医学の歴史に立脚して収集された見識をうかがうことができる。

これに対して、蘭方関係の医書の収集の成果はかなり高く多くの医書が収蔵されている。これ等は、江戸時代後半期の日本の医学を知る上で大変貴重な資料で、書名は知っていてもなかなか現物に目を通すことは少ないものもある。今回の整理に当たっては、多少解説と分類に工夫して目録を見ただけでも或程度の見当がつく様にしてみた。

なおここには今回とりあげなかったが、『医学天正記』曲直瀬道三(慶長12年刊)、『蔵志』山脇東洋(宝暦8年)、『産論翼』賀川子啓(安永4年刊)、『十四経發揮』明代滑寿(慶安二和刻本)、『蚊病発瀉』糟谷駿(天保四年刊)、など沢山の和・漢の医書が所蔵されている。

これらに関しては、別の機会に紹介させていただくことにしたい。

稿をまとめるにあたって御尽力いただいた、前亥鼻分館々長橘正道名誉教授に篤く御礼を申しあげます。